

地 教 史 学 通 信	第 164 号 2024 年 1 月 20 日 全国地方教育史学会
---	---

麗しく 2025 年が明けました。昨年は改革 WG「最終答申」や「研究倫理規範」のご審議をいただき、誠にありがとうございました。さらなる学会の活性化に向けて、皆様のお力添えをお願い申し上げます。

さて、「地教史学通信」第 164 号をお届けします。内容は、①第 48 回長野大会の概要、②研究発表申込みのご案内、③茨城県立歴史館の紹介、④事務連絡の 3 点です。

I. 2025 年度の第 48 回大会について

第 48 回大会は、竹内久隆会員（長野市公文書館）、須田将司幹事（学習院大学）により鋭意準備中です。以下に概要を示しますので、宿泊先の確保等にお役立て下さい。

なお、プログラムなどを含めた詳細については、3 月中・下旬発行予定の「通信」第 165 号で改めてご連絡します。多くの会員の発表申込み、ご参加をお待ちしています。

（1）開催日：2025 年 6 月 7 日（土）・8 日（日）

（2）会 場：以下の通りです。

①6 月 7 日：史料見学会は「長野市公文書館」にて開催します。同館勤務の竹内久隆会員より

「当館所蔵の教育史関係資料としては、長野市の中心校であった城山小学校・旧後町小学校資料をはじめ、市内の吉田小学校・旧川柳小学校等の資料があります。加えて、平成大合併で編入された旧上水内郡・旧更級郡の町村の学校資料があり、市内中心部に比べて充実しています。当日は書庫内の見学と同時に、主立った資料は別室で手に取ってご覧いただけるように考えて準備をしております。」

→長野市公文書館 HP アクセス

<https://www.city.nagano.nagano.jp/kobunsho/p005987.html>

②6 月 8 日：研究発表・シンポジウム・総会は「長野市生涯学習センター」にて行います。

→〒380-0834 長野市大字鶴賀問御所町 1271-3 TOiGO WEST 3・4 階（JR 長野駅善光寺口より徒歩約 10 分）

＊シンポジウム：テーマ：「長野県における学校資料保存の最前線」

パネリスト：遠藤 正教（国宝旧開智学校校舎学芸員）

竹内 久隆（長野市公文書館専門主事）

指定討論者：小野 雅章（日本大学）

司 会：須田 将司（学習院大学）

趣旨：少子化・過疎化が進展する日本社会において、小・中・高校の廃校は留まるところを知らない。2000 年代以降をみても、おおむね 200 校以上で推移し（文科省「学校基本調査」より）、その数だけ、学校資料の収集・保存・活用および廃棄の問題が生じている、これは、人口減少の局面にある日本社会に生じている新たな教育学・教育史上の課題といえよう。こうした状況に対し、本学会では第 46 回大会（2023 年）で「地域の教育史資料の収集・保存・活用」と題したシンポジウムを開催したほか、2024 年度の「改革 WG 最終答申」で「学校資料の分類（残すべき資料、価値）・保存の方法について提言・発信」、「学校資料保存に関する声明を本学会として発出」、「何年かに一度、学校資料保存のシンポジウムを開く」などの方向性が掲げられてきた。

今回の開催地は、傑出した業績である県教育史編さん（全 18 巻 1972 年 3 月～1983 年 3 月）の過程

で全県下の学校資料保存状況調査が行われたという長野県である。目下、県内ではいかなる取り組みが行われているのだろうか。2019年9月に国宝指定を受けた松本市・開智学校校舎の遠藤氏、一日目の史料見学会場・長野市公文書館の竹内会員から、最前線のお話をいただく。指定討論者として、旧開智学校と上諏訪小学校旧高島小学校文書に詳しく「学校所蔵史料の比較検討による地域教育史の再考」の業績がある小野会員に登壇いただき、史料を「残すこと」に加え、学校資料を活用することで、いかなる地域教育史研究の発展可能性があるのかを考えてみたい。

II. 第48回大会の研究発表申込みについて

第48回大会で研究発表を希望される会員は、次の要領で申込みをお願いします。なお、2024年度までの会費を完納されていることが条件となります。

- (1) e-mailでの申し込みを原則とします。本通信の末尾に記載してある事務局まで、
「①氏名、②所属、③メールアドレス、④題目、⑤概要(時期・対象がわかるようになるべく詳しく)、⑥使用機器に関する要望(パワーポイントその他)、⑦その他」
の7項目についてお知らせ下さい。なお、従来通りに郵送/FAXを希望される会員は、事務局まで上記①②④⑤⑥⑦の6項目をお知らせ下さい(様式は任意)。
- (2) 申込みの〆切は「2025年3月9日(日)」(必着)とさせていただきます。
- (3) 申込みを受理した会員には、3日以内に事務局から確認の連絡をお送りします。3月12日(水)までに連絡がない場合、お手数ですが、ご照会下さい。

III. 各地の博物館・文書館の情報

本学会の在り方を考えるWG(2022年12月～2023年11月)のなかで、通信の在り方も検討され、2023年7月の「中間答申」において、「各地の博物館や文書館などで行われている教育関係の企画展の情報掲載や、博物館・文書館の情報や利用方法など、短信や1ページ企画で集約・発信することも検討されるべきである」と提言がなされました。これを受けた新企画として、佐藤環幹事による茨城県立歴史館の紹介記事をお送りします。皆様もぜひ、お近くの博物館・文書館の情報を事務局までお寄せいただければ幸いです。

~~~~~ 教育に関する史資料の収蔵施設 ー茨城県立歴史館ー

佐藤 環

今回取り上げる茨城県立歴史館は、1974年に文書館部門と博物館部門を有する歴史博物館として茨城県立水戸農業高校の跡地に開館した。茨城県に関する史資料を収集・整理・保存して一般の利用者にそれらを提供するほか各種展示事業を展開している。また一橋徳川家の寄贈を受けた史料、工芸品、美術品などを収蔵する「一橋徳川家記念室」が館内に併置されており、テーマ別に収蔵品を公開している。歴史館の敷地内には1881年に竣工した旧水海道小学校本館が1974年に移築され教育資料が展示されているほか、茨城県立水戸農学校本館が復元されている。

歴史館では、文書館部門が管理する史資料はホームページから検索が可能である。閲覧室は当日でも利用が可能であるが、事前予約優先制である。詳しくは同館のホームページで確認して下さい。

なお、茨城県立歴史館史料学芸部行政資料の富田任課資料調査専門員に史資料に関する情報のご教授・ご協力を戴いたことを附記します。

1. 収蔵資料について

(1) 近世

①藩校文書

現在の茨城県域には 14 藩、飛び地、幕領・旗本領があった。藩校設置状況は、水戸藩 35 万石・弘道館、松岡藩 2.5 万石・就将館、宍戸藩 1 万石・修徳館（明治期）、府中藩 2 万石・興風館（明治期）、笠間藩 8 万石・時習館、下館藩 2 万石・義蒙館、土浦藩 9.5 万石・郁文館、谷田部藩 1.6 万石・弘道館、麻生藩 1 万石・精義館、牛久藩 1 万石・正心館とされる。藩の規模が小さい教育関連の史資料は、当該自治体の公立図書館や自治体史編集の際に収集したものが教育委員会に保存されていることがある。本館では、松岡藩就将館、笠間藩時習館、麻生藩精義館、水戸藩弘道館の史料が収蔵されている。

特に弘道館関係の史資料は、近世史料のほか明治以降の史資料も充実している。近世史料としては、徳川斉昭（烈公）の「弘道館記」およびその拓本、弘道館学事文書（「弘道館御開御達留」、「弘道館御用留」、「日記」など）、弘道館学生の学びに関する史料（医学、剣術など）が収蔵されている。それらの史料は、本館史料学芸部により翻刻され茨城県立歴史館史料叢書として順次刊行されている。『弘道館史料Ⅰ』（2000 年）には御用留・文武見分（試験）、『弘道館史料Ⅱ』（2003 年）には学校日記、『弘道館史料Ⅲ』（2021 年）には弘道館の教員以外の職員や水戸藩全体の政治動向がわかる史料、『弘道館史料Ⅳ』（2022 年）には嘉永から文久にかけての日記・日録や明治 5 年の日録が収められている。特に明治 5 年の日録では、従来補完関係にあった弘道館と予備教育を行う家塾の切り離しが進行し、同年 8 月の学制発布により弘道館が廃止される過程を示す重要な史料である。

②郷校

19 世紀初頭から幕末期にかけて水戸藩領に 15 の郷校が設立されていた（鈴木暎一『水戸藩学問・教育史の研究』）。初期の郷学は主に医学教育機関として設置されていたが、安政期以降、医学に加えて儒学や軍事訓練がなされていった。本館では、小川郷校稽医館、湊郷校敬業館、大田（太田）郷校益習館、太子郷校、小菅（古里）郷校の史料が収蔵されている。

③私塾

学者が自宅を開放して門弟に教育を施す私塾では、水戸藩士の藤田幽谷・東湖父子による青藍舎、会沢正志斎の南街塾、そして施設規模や門弟数で他を圧倒した水戸藩郷士の加倉井砂山の日新塾が有名である。特に天保期から明治中期まで存続した日新塾の史資料は、江戸期の教育実態を示すものや明治期の使用教材など約 600 点収蔵されている。なお、加倉井砂山の功績を伝承することを目的として 1942 年に設立された日新塾精神顕揚会は、財団運営が困難であるとして、その所有地などは水戸市に寄付して 2024 年に解散した。

④藩士について

武士階層に着目する研究の基礎史料として、御目見以上の水戸藩士に関する系譜を収録した「水府系纂」がある。1 巻から 88 巻及び附録から構成されているが、58 巻上及び 61 巻は原本がなく欠巻となっている（「水府系纂目録」による）。

(2) 近代

①茨城県報

茨城県の公文の掲載誌である。県公文は当初、布達と通称され第何号と番号が付された。やがて、布達の対象や内容から甲号、乙号、丙号、次いで県令、告示、諭告、訓令が用いられるようになったが、今日に続く茨城県報の発行開始は 1902 年 4 月 1 日である。

歴史館では布達、県報を含めて一括し、1872年から1968年6月までを写真版（明治期については原本の収集が不完全で欠如している部分あり）で、同年7月以降から2018年12月までは、原本で保存、公開している。なお、2019年以降は県が印刷を取り止めたため収集・製本はそれ以降行っていない。

なお、教育に関する布達目録として、「茨城県教育関係布達目録 史料目録2」（1975年3月31日発行）が発行されており、「学制」頒布の1872年から教育基本法公布の1947年までが採録される。県報中に、教員免許状原簿登録や戦前期の小学校教員や中学校教員の検定に関するデータを見ることができる。

②教育資料（小学校所蔵教育資料）

かつての小学校は地域の行政センターとしての役割も担い、その所蔵する資料には地域に関する歴史資料が含まれている。歴史館は、これらの地域に関する歴史資料を収集・保存し、一般に公開する事業を実施している。1995年から、県内の各小学校が所蔵する資料を借用し画像を収集し、写真版を作成して閲覧に供している。収集対象資料は、学校沿革誌、郷土誌、学校日誌等であり、過去29年間に収集資料約2,900点、マイクロフィルム及びデジタル画像で約29.3万コマ分の撮影を行っている。現在、県北部と県中央部の小学校の資料が閲覧できる。なお、教育資料の利用に当たっては、HPからの検索が未整備のため、閲覧室備付けの目録を利用する必要がある。

③『茨城教育協会雑誌』『茨城教育』

1884年に発足した茨城教育協会が発行した機関誌が『茨城教育協会雑誌』であり、この組織が1908年に茨城県教育会と改称した後に発行された機関誌が『茨城教育』である。歴史館では写真版を閲覧できるが、索引を備えた表題の総目録が刊行されており研究上有用である。史料目録49「茨城教育」表題総目録(2005年3月)、史料目録51「茨城教育協会雑誌」表題総目録(2007年3月)。

④教育資料を含む代表的な私文書（家文書）

ア 栃木家史料

水戸市の栃木家に伝えられた栃木正雄旧蔵の史料、1,015点。栃木正雄は、学校教育及び社会教育分野で活躍した、史料は、昭和前期の在郷軍人関係のほかは、戦中から1970年までの社会科・国語科関係及び社会教育関係のものが多く、また教育関係行政刊行物には『茨城県教育要覧』が1950年から1970年まで揃っており、茨城県教育行政の流れを知るのに便利である。

イ 平井家史料

水戸市に住み長い間茨城県の教育行政に携わっていた平井太平が、職務上の必要から保管しておいた教育行政の推進に関わる通達・通知や照会・回答文書及び刊本類などの史料、219点。平井は1929年に教員となり第二次世界大戦後、那珂郡視学委員、県視学補として占領軍が進めた教育改革や新しい教育制度の推進に関わったことから、史料の大部分は教育改革期のものである。原史料の劣化が著しいので、閲覧にはコピー版が供されている。

⑤図書 海老原恒久編集『茨城県中等学校教育史料 公文拾遺』など

元教員の海老原恒久氏が編集した刊行物。当初は、旧制水海道中学校（現水海道第一高校）の沿革史作成のための史料集であったが、後に茨城県中等学校教育史料公文拾遺3冊に結実した。刊行時期は2001年から2008年頃まで。

2. 出版事業

(1)『茨城県史研究』

茨城県史編さん方針の徹底と事業経過の中間報告を使命（「茨城県史編さん要綱」第11条）とし、さらに

本県における教育文化のすべての運動と密接な関係のもとに、大きな政治経済文化活動の一翼を担っていくことを目的として、1965年3月25日に第1号が刊行された。創刊号から37号までは年3回、38号以降は年2回、85号以降は年1回発行され、2016年3月に創刊50年、通算100号を迎えた。

1996年3月の県史編さん事業の終了から20年間発行を続けてきたが、一応の使命は達成されたことから、この100号という区切りをもって休刊となる。長期の連載となった山川菊栄氏の「幕末の水戸藩」、林基氏の「松波勘十郎搜索」はまとめて単行本化されたほか、各執筆者の代表作として学術書籍に採録された論文も多い。

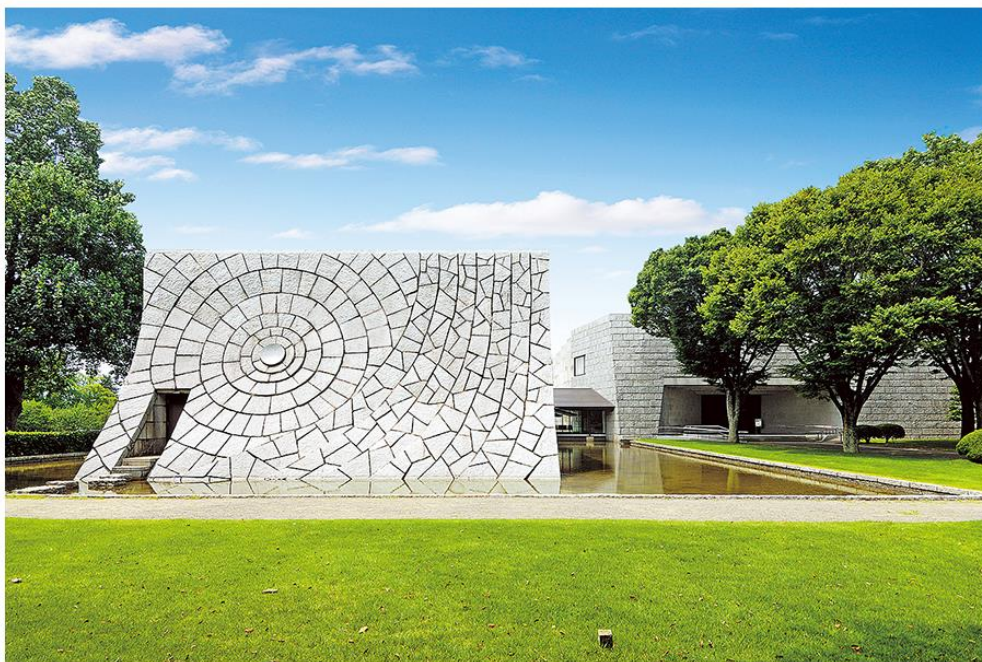
(2)『茨城県(立)歴史館報』

歴史館職員の執筆による研究紀要。歴史館の創立年である1974年3月に第1号が刊行された。毎年度発行され、2025年3月に第52号が刊行される予定である。

(3)『茨城県立歴史館史料叢書』

歴史館が収集・保存している史料には、そのままでは難解で読みにくいが利用価値が高い史料が数多くある。それらを平易に広く県民の利用に供することを目的として、1998年3月から翻刻し、解説文を加えて毎年度編集刊行されている。第1号は「国立公文書館内閣文庫蔵茨城県史料 上」で、最新刊の第28号「常総遺文」が2025年3月に刊行される。

茨城県立歴史館



四季折々の美しい庭園を楽しみながら茨城県の歴史にふれる

茨城の原始・古代から近現代に至る歴史の流れを概観できる常設展をはじめ、特別展および年数回の企画展を開催しています。その他、一橋徳川家記念室でも年数回の展示替えを行っています。また、歴史博物館と文書館の機能を併せ持つ施設として、茨城県の歴史に関する資料や公文書を収集・保存しています。偕楽園公園の一部でもある広い敷地のなかには、茨城県指定文化財である旧水海道小学校本館や旧茂木家住宅も移築されており、銀杏並木をはじめとする樹木や草木が季節によってさまざまな装いを見せてくれます。

※茨城県教育委員会 HP より (<https://kyoiku.pref.ibaraki.jp/art-and-culture/museum/history/>)

3. 敷地内の建築物 一水海道小学校本館一

水海道小学校は、常総市（旧水海道市）に現存する小学校である。その本館は 1881 年に建築され、1921 年の同校移転に伴い移築され玄関部などが一部改造された。1958 年、建築当時の面影を伝え明治初期の小学校建築の形態を保存していることから水海道小学校本館は県の文化財に指定された。1971 年に、この建物は水海道市立水海道小学校から歴史館に寄贈され、建築当時の設計図をもとに当初の姿に復元した。1976 年からは内部に展示室を設け教育資料及び水海道小学校関係の史資料を展示・公開している。

校舎を設計・建築したのは水海道の宮大工・羽田甚蔵で、女優羽田美智子はその子孫である。また、ピアノ展示室には、かつて水海道小学校で音楽教育に使われた 1865 年にアメリカ・ニューヨーク市のスタインウェイ&サンズ社で製造されたピアノが鎮座する（製造番号 11013）。

4. 教育史関連のイベント実施

(1) 水海道小学校本館におけるピアノ演奏体験

スタインウェイ&サンズ社が慶応元年(1865)に製造したグランドピアノで演奏体験ができる催しを行っている。

(2) アーカイブズ講座

学校資料の史的価値とその活用についての講演、そして学校日誌や沿革誌を用いた演習を行っている。

以上

IV. 諸連絡

【寄贈図書】

・近藤健一郎会員より：沖縄県宜野湾市教育委員会教育部市立博物館『宜野湾市史別冊 ぎのわん教育のあゆみ』2024 年 3 月

◆会費納入について

会費未納の方へは振込用紙を同封しました。お手数ですが、郵便局（ゆうちょ銀行）にて納入をよろしくお願いします。また、行き違いで振込用紙を同封する場合がありますが、その節はご容赦下さい。

【紀要のバックナンバーについて】

紀要のバックナンバーを購入することが可能です。1 部につき 1,000 円（送料込み）です。在庫及び詳細については、学会 HP 内の「紀要」→『『地方教育史研究』バックナンバー』をご参照ください。

全国地方教育史学会 事務局

〒171-8588 東京都豊島区目白 1 - 5 - 1 学習院大学文学部教育学科 須田将司 研究室内

TEL/FAX 03-5904-9341

E-mail masashi.suda@gakushuin.ac.jp

公式 HP <https://w3.waseda.jp/assoc-zckyoiku/>
